

国木田独歩の「理想の事業」と

「小民史」の文学的創造

北野 昭彦

I 問題のおおよそ

独歩の作品をそのモチーフに基づいて分類すれば、大体次のように四分されよう。⁽¹⁾

(1)理想を追求する主体の人たる人間の内側を描いたもの（帰去来・空知川の岸辺） (2)人間的実存の自覚に到達すべき眞の文学者たらんとする内面の苦悩の告白を基調としたもの（牛肉と馬鈴薯・悪魔） (3)「小民」を描いたもの（源をぢ・竹の木戸） (4)世俗の虚偽や虚飾、俗物性への反逆精神に基づくもの（正直者・帽子）

このうち(1)と(2)の主人公は独歩自身の反映であり、(3)の主人公は独歩の詩心に「限りなきの同情」と共感を喚起せしめた対象の描出である。独歩は(1)を浪漫的出発点とし、(2)の世界に自己の使命を定着させ、(3)および(4)の作を多く創造した。(3)と(4)とは、その主人公の形象において、ともに(2)の見地から捉えられたところの、肯定的人間像と否定的人間像との対極をなしている。

この中で最も多いのが(3)の諸作で、独歩が小民史の詩人といわれる所以である。この小民観・小民愛の形成は、「ナポレオンも秀吉もいつかう豪く無くなつて」「其豪いと言ふ意義がまるで違つて来」た（奈何にして小説家となりし乎）という人間観の変革を来した「精神上の大革命」（同）が前提となり、従来これに関してワーズワース、吉田松陰の「愛民思想、徳徳蘇峰の「平民主義」等との影響関係が論じられてきたが、私はこれを別の角度から論じてみたい。（以下「欺かざるの記」の引用はその日付のみを明記する。）

独歩が「吾何を為すべきか。（中略）政治か、宗教か、文学か、哲学か」（27・7・18）と「煩悶」を続けた所以は、その何れのジャンルをも「理想の事業」（26・2・3）の一環として活用しようとする全体的統一の欲求を、現実的条件から阻害された結果であつた。⁽²⁾当然、文学も「理想の事業」だつた。では、その「理想の事業」が、「小民史」の文学創造へどうつながっていくのか。独歩の描く「小民」は、明治社会の発展から疎外された下積みの

貧しい民衆か、功名の舞台を求めずに片隅に黙々と生きる善良の民である。この歴史の底辺に人知れず埋もれ、しかも社会を底辺から支える歴史の眞の担い手ともいふべき無名の民に、独歩は文学的追及の眼を向けた。彼はこういう人生の中に人間の眞実を発見し、これを「人類眞の歴史」(26・3・21)として全体の中に意義づけつつ、明治三十年から約十年間、「小民」の人生を全く新しいヒューマニズムの見地か照らし出して数々の美しい文学作品に結晶してみせた。これは「日本近代文学の小市民的自己封鎖の動向」のなかで、異質の可能性をまつたく独自に開いたものとしてきわめて高く評価されねばならぬ⁽⁴⁾であろう。が、反面これを二葉亭の「浮雲」、鷗外の「舞姫」、魯庵の「くれの二十八日」、藤村の「破戒」、芦花の「黒潮」、尚江の「火の柱」等の主人公と比すれば、独歩の「小民」像には「淳朴の人生」はあつても、明治青年の「理想」を託すには小型の人間像であつたことは否めない。「理想の事業」を追うアクティヴの青年独歩の活動が、「小民」的人間像の造型へとその使命を定着させるに至るまでには、どんな必然的コースがたどられ、また、それは彼の文学をどう本質づけていつたのか。

Ⅰ 現実の動向と精神革命とのあいだ

「吾国先づ政治的に開国して、次に社会的に開国せり。(中略)最後に来りしは精神的開国派。」(民友記者徳富猪一郎氏)と独歩はいう。近代ヨーロッパの歩みは一步一步が自覚と発明と冒険の過

国木田独歩の「理想の事業」と「小民史」の文学的創造

程で、予定のプログラムによる成立ではなかつたが、明治日本の歴史は欧米先進国の政治や文明形態を範型として、近代国家としての枠が外からの模倣摂取、上からの改革として行われた。そして独歩のいう如く、「欧州の政治的文明のみに着目し、(中略)之れを入れて以て、一躍して十九世紀欧州の文明に達し得べしと思はしめた」(同)のである。そして先進国と逆、漸く国家の見透しがついてきた二十年前後まで遅れて、その枠に入れられるべき内容——個人や社会や道徳や宗教が顧みられるようになる。

独歩が功名心を燃やして上京し、政治家を志して東京専門学校英語政治科に在籍したのは丁度この頃である。すでに自由民権運動は解体し、その一部は敵の陣営に走り、再建された立憲自由党は絶対専制権力と妥協の産物だつた。政治青年・独歩は、憲法発布から第一回帝国議会召集のさ中、東京にいたが、すでに憲法発布によつて制度上の改革に一段落つき、政治も空想を許さず、高い理想よりも實際上の政策が中心になり、政論よりも政治家としての地位の方へ重点がおかれていた。

独歩の「あの時分」を読むと、功名の舞台を求めて東京に集まり来つた学生達にとつて、民権運動時代の政治的熱狂が過ぎ去つた後に身を置く空虚感が、どことなく感じられる。しかし、かつての政治にとつて代つて青年の心を捉えつつある《新しい波》も始まつていた。作中には演説会の花形として活躍する「血気の連中」も描かれているが、それよりも「私」に近い位置にあつたのが、この《新しい波》を代表する木村である。⁽⁵⁾「あの時分」には、

「私」がこの木村に連れられて初めて教会に行つた時の感激的シーンが、明治のロマンチズムの香り高い筆致で描かれている。

政治的熱狂の去つた後の精神的空虚感——それは人々の心を内面に向ける。そこへ当時の欧化主義政策も手伝つてキリスト教は飛躍的にのびた。個人の自由、平等、博愛等の近代精神がキリスト教を通して青年特有の心的状態にアピールし、人生問題開眼への心の窓ともなる。個々の人格の神による解放という形で人間解放——法の前の平等から神の前における平等、政治的自由から精神的自由へ——そこには政治だけでは解決できぬ「人間」の問題があり、そこに新しい人間の信頼が形造られたとしてもふしぎではない。独歩も「基督教にて示された宇宙観、人生観などが寝ても覚めても自分を或は悩まし或は慰め、それに心を奪はれて實際の事は殆ど手にもつかぬ場合もありました。」(奈何にして小説家となりし乎)と告白しているくらいである。

独歩の内についた「精神革命」は彼の読書傾向を一変した。「以前は憲法論を読み、経済書を読み、グラッドストンの演説集を読み、パーレーの英国史を読んだ自分は、知らず知らず此等を捨ててカーライルのサルト・レザルタスを読み、ヨーズヤースの詩集にあこがれ、ゲーテを覗き見するといふ始末に立到りました。」

(同) こうした内面の変革によつて理想は高揚されたが、反面、「実際の事は殆ど手にもつかぬ場合もあり、」それだけ現実性の乏しいものともなつた。今や彼の関心事は「欧州文明の根底に鬱勃せる活火」「即ち基督教道念の活火」(民友記者徳富猪一郎氏)へ

移行した。近代の政治体制や政治思想そのものよりも、そうした政治体制を根本より成り立たしめている個々人の内面的根柢、人間観の根柢が重大関心事となつた。だから独歩には「精神的開国派」こそ「政治の上に、教育の上に、文学の上に、社会の上に」(中略)革新の道を開拓する者」(同)であつた。なぜなら、人間革命が達成されたところにこそ、所期の社会革命も完うできると考えられたからである。「余は革命党の必要を感じるものの発頭人なり。革命なるかな、革命なるかな、大革命なるかな」と熱狂的に革命を欲した独歩は、「大革命を成就せんと思へば先づ精神的大革命を以て始めざるべからず。」と主張する。(丁度、政治の動きが高い理想から実際上の政策に移行したのとは逆過程を、独歩の内面はたどりつたのだつた。しかも現実の動きは自由民権運動が敗退し、絶対主義体制が定着したため、現実の動向と精神革命との間の矛盾は深まる一方だつた。)

では、この理想主義者・独歩は、革命へのいかなるビジョンをもつていたか。次の記事に着目してみよう。「理想——成程吾には理想あるなり、此の世は実の世にして決して夢の世に非ず、神は存在す、、、、今書かずともよし、兎も角も理想の人間、理想の国家、理想の社会、これ等の事を十分考察して記憶し居る可し。」(26・2・23)この「、、、」は何を意味するか。自己の内奥の思想感情を語る場合には、「欺かざるの記」全篇にあればど生き生きした思索を展開した独歩も、ひとたび「理想の国家、理想の社会」という問題に直面す

ると、自信をもつて具体的なプログラムを提示できなかったことの何よりの傍証ではあるまいか。後に独歩は「わが過去は熱情と理想と私慾との戦ひなりき」と反省し、「若し人を二種に分てば、其手近にあることを為して着々其歩を進め行く人と、常に鼻頭^{はなまき}を去る幾尺の空間に或者を描きだし、之れに破らしむるに黄金色の光沢を以てしてこれを望見して拱手自ら樂しむ人との二種なりとす。渠^渠(註——独歩自身の三人称化)の如きは其の何れに属すべき人乎」(わが過去)と自問している。これは彼自身がリアリストであるよりもむしろロマンチストとであること(或は、あったこと)への自覚であろうか。

独歩はブルジョア革命後の先進国を範型に日本の未来像を描いたが、彼のいう「理想の国家・理想の社会」とは、地上現実の国家や社会というよりは、むしろロマンチストの描く理想の国ではなかつたか。かつて西欧の若い浪漫派の詩人達はフランス革命にユートピアの希望を期待し、それが直ちに地上現実の革命運動に直結して狂熱的に革命的となり、理想社会の実現を目前の幻に描いた。彼らの胸に描いた「祖国」は、現実政治家が考えるような地上の権力国家ではなく、あくまでロマンチストの描く理想の世界そのものだつた。これは中野好夫氏の言によれば「美しい迷妄」であつた。同じことがこの明治日本の青年ロマンチストにもいへはしまいか。われわれは「欺かざるの記」で「、、、、、、」に伏せられたところの、ロマンチストの描く理想世界、或はその一片を、別稿の「社会と人」の中に窺い知ることが出来る

であろう。

III 「理想の事業」のアウトライン

「理想の事業」とは、「社会。人心を導き、社会。人事を改進せしめ、人生進歩に加ふ可き事業」(26・4・21)である。これは前述の「美しい迷妄」と不可分にある。以下、「社会と人」の中にその概要を探つてみよう。

「人生の真意は『社会利害』の外に有りて而して働にあり。之れ人間最高の理想也。」この「最高の理想」こそ、「理想の事業」に終始一貫した基調である。この理想に対立するのは「社会的」である。「社会的とは何ぞや。『名』『利』を追争するの謂ひなり。凡百の社会的罪惡は悉く此の中より出づ。」かくて「人類の進歩は常に社会的の為に妨げら」れてきた。「『名と利』は限りある」ゆえに「勢ひ争うて取」り、「人間社会を織り出して修羅となす。」そして「王者の宮殿」が築かれる一方、他方で「隸属」や「貧」の問題が起り、「社会貧患の懸絶あり、上下の尊卑あり、不平等あり、不公平あり」る。「社会的弊習」が現実化した。元来「天より賜はるべき人の靈は極めて純粹無欠の者」であり、人は「玉の如く、清き泉の如き、天使の如き、心と情と靈を以て此世に來りたれど、」次第に社会的に同化せられつつ進み、「遂に再び此の社会的を打破りて先の玉の如き泉の如き天使となる能はず、」社会に没入して遂に社会を率ゆる能はざる」結果となる。そこで吾人は「社会に没入」することなく、「社会的の以外に立つ」

「ことによつて初めて『理想の上に立』ち、「能く社会人類を導」き得るのである。

この理想の規範は「紛々名利の中に何事も為す能はざる」過去の歴史や習慣に求めるのではない。「只せまくるしき過去の歴史のみかへり見ずして永久の前途を見よ。」「永久の前途」とは、「無名、無功、無私の中に万物運行して其の宜しきを得、美となり、善となり、真となる」ところの「天地自然力」の「永久の前途」である。「人間の理想」を「其の自然力の形態の如くならしめ」ること——ここにその規範は求められた。「自然をして最後の行司たらしめよ。人間の本来の性情の上に於て、人間の上に人間を置くを許さず。欧州に於て民主政の發達せるも亦如此。人為を以て『人』を不平等になし得る者と信ずるが故に野心起り、嫉妬起る。『人』は其価値に於て凡て平等なり。何となれば『人』の価値を定るは其の『人』の『生存の価値』に於ける信仰の如何によるなるが故に、社会的の標準は一つも取るに足らざればなり。」かくて「此の自然力を神に帰し、其の神の意によりて働く」のが、「彼の心靈が有する理想に尤も適ふ」生き方だと考えられた。「物質的の事業に働く人は則ち『物質的』と『精神的』の一致の為に働」き、「物質的」生業に働く」と『精神的』の事業に働くを問わず、其の働く爾が『存在』は必ず彼の理想の上に立」ち、「凡ての人、『人類』を造り、凡ての人の合同の仕事」によつて、「人悉く愛と美と真の上に立つ」理想界へ「此人類社会全体」を到達せしめねばならない。

こうした「黄金時代」は待ち望むのではなく、日本が新しい歴史を踏み出したこの明治の世にこそ、「社会人民を率ゐて」人類の進歩を常に妨げてきた「『社会的』を削除」し、「此人類社会をして進歩して此の理想界に達し得べからしむる」ために働くのである。ここに「理想の事業」の真意がある（以上、「社会と人」より）。だからこそ独歩は「我國民をして真理理想に由て立つの國民たらしめ、我國運をして世界人類の魁たらしめん」（26・2・19）と志して政界に立とうとしたのだ。

一方、「文学を以て事業と成す」（26・4・24）と自己に命じた独歩にとつて、「文学の効用は一に教、二に慰」（家庭文学）であつた。詩人・文学者は「詩眼を以て、『人間は如何に生活すべきか』、(How to live)てふ問題に付て感得したる理想をば、詩情を以て詩文に現はし、以て同胞人類を真理と善徳に導くべき使命を有する（中略）人類の師」（田家文学とは何ぞ）であると価値づけられた。文学は社会人心をその内面からかの真理理想に導き、政治は体制の変革によつてかの理想界に到達せしめるための、ともに「理想の事業」と考えられたのであつた。

IV 小民史へのイントロダクション

独歩は政治か文学かの迷いに自ら解決を下すより先に、生活上の理由から政治に接近し、明治26年2月、自由党の機関紙「自由」の社員になつた。しかし絶対専制権力との妥協によつて再建されたこの自由党に、独歩の「大革命」の理想は期待できなかつた。

独歩は自由党を「乾燥極まる政党」と難じ、「渠等^{かれら}政党员等はクロンウエルを知らずミルトンを知らずして自由を談じ、ユーゴーを読まずして社会問題を解かんとするの輩なり、故に渠等の愛国は愛国を愛国するなり、渠等は国民を只だ法律憲法に由て取り扱ふの他を知らざるなり、」(26・2・19)と失望し、「吾は急進党、理想的革新党の起らざる以上は、現今の政党も此のまゝにては遂に吾が敵たるを知りたり、」(同)「薩長は閥を以て腐り、自由党は閥を以て腐り、改進黨は閥を以て腐り、日本政界は日に益々腐朽に進みつゝあるなり。」(26・4・16)と嘆じている。そして「予言者出でよ、革命来れ」(同)と切望した。

近代の政治形態そのものよりも、そうした政治形態を成り立たしめる個人の内面的根柢、人間観の根本を革命の源泉として重視した独歩にとつて、ミルトン、ユーゴー云々は、単に読書の問題ではなくて、革命の理想やヒューマニズムの欠如への批判に通ずるものであつた。そういう独歩であつたからこそ、立憲君主制への日本の進路が決定して高い理想よりも實際上の政策・政論よりも政治家としての地位を重視した政界の動向が、閥によつて腐敗した空しい権勢争いとしてのみ彼の目に映じたのも、決してふしぎではない。

自己の理想を実現する具体的プログラムはおぼつかなく、「急進黨、理想的革新党」も見出せず、「現今の政党」がすべて「敵」であれば、理想の事業を政治的制度的に推進する方法も、社会的勢力もないのである。あるのは、理想を追う情熱のみ強くて、そ

の推進基盤もなく、独り革命を切望する焦燥感のみである。革命的情熱も理想もヒューマニズムも欠如した「乾燥極まる政党」にあつては、「政治的」とは「即ち野心的・名利的・肉慾的」(26・2・19)であるにすぎない。「現今の政党」の「政治的」がそのようなものでしかないとすれば、彼はそれを拒否し、そのような「政治的」の外側に立たねばならぬ。しかし、それに代つて「理想の足場」となる「政治的」イデオロギーにも、「政党」にも遭遇できなかつたとすれば、当面、自らが「政治的」たることへの全面的否定へと進まざるをえないと考へたのではあるまいか。独歩が「吾政界を悪むに非ざるも、吾は政界に立つ以上はやゝもすれば権勢を愛し、虚栄を願ふ為めに狂弄するを免ぬがれず」(26・3・21)と考え、政界を去つて「人間の教師」として文学に志せよとした所以がここにある。

「人間的」と「政治的」とを全体的統一的に追求していくことから、一方の「政治的」を断念せざるをえないすれば、「人間」を唯一の旗印にして進まねばならない。

政界、即ち空しい名利・野心・権勢争いの「虚栄城中」(26・3・21)から身を引いて、「人間」を唯一の旗印に掲げた独歩の眼はどこに向けられ、どこに「人間」の真実を求めたか。彼の求めたのは、そうした名利・野心・権勢・虚栄、社会利害……などというネガティブのものと一切無縁の人生であつた。「政治」を離れ、「大革命」の事業に投ずることを断念せねばならなかつたがゆえに、当初からその理想とする「社会利害」の外に有りて而

して働にあゝる人生を、現実にある存在の中に追求しようとしたのである。その対象は単に空想や詩想の所産ではなく、「かの三家村里、若しくは佐賀村岩城山下の同胞人類」(26・3・21)という現実的存在である。「野に生れて野に死し、村に生れて村に死し、生れて河に手を洗ひ、死して岸に葬らるゝ吾が愛す可き同胞よ、パニチーに苦みたる心を転じて静かに御身が一生を思ふ時は、始めて人生の真面目なる樂を悟る也。深き意味を感ずる也。」

(26・11・12)ここに彼は『社会利害』の外に有りて而して働ゝく人生の具現者を現実に見出したのである。そうした人間像の総称が所謂「小民」であつた。

人はより好ましい人間像を自己の具体的周囲に発見することによつて、真にヒューマニスティックたりうるし、文学者ならそれを描き造型することによつて、自己の人間形質をそれに近い存在へと形づくつていく。

しかし、現実の体制の中にネガティブなものしか見出せぬ者が、『社会利害』の外に有りて而して働にあゝる人生を具体的現実の中に見出し得たとすれば、それは現実の支配機構からはみ出したところに見出される存在であろう。なぜなら、明治の社会体制を舞台に活躍する連中は、彼にとつては何らかの形で「社会利害」や「虚栄城中」につながる存在ではかあり得ないだろうから、独歩の描く作中人物の多くが、近代文明と無縁な太古さながらの自然に生きる人々か、世俗に染まぬ純粋無垢の少年であつたり、社会から置き去られた下積み貧しい人々であつたり、また支配

機構の中にあつても功名とは縁遠い片隅で趣味に生き甲斐を見出す平凡人であるのは、以上の理由からである。かくて「理想の事業」を追い求めたアクティヴの人と、片隅に生きる無名の民衆とは、『社会利害』の外に有りて而して働にあゝる人生』を共通項として結びついていたのである。

V その文学的本質

「多くの歴史は虚栄の歴史なり、パニチーの記録なり。人類の歴史は山林海浜の小民に問へ、哲学史と文学史と政權史と文明史の外に小民史を加へよ、人類の歴史始めて全からん。……」

(中略)……(人間心霊、ヒューマニティーの叫声を記録せよ)……
 ……(中略)……(伝記は断じて歴史より貴し。)(26・3・21)

この「小民」への肯定性は、一面から見れば、名利・野心・虚栄・社会利害といった否定的側面と無縁であるという意味からの消極的肯定とも見られよう。事実、「小民」それ自体は現実を變革して理想を実現する革新的エネルギーの持主ではなく、独歩もそういう捉え方はしていない。その意味では、「小民」は独歩にとつて好ましい人間像ではあつても、理想を追求する主体の人たる人間像ではありえなかつたのである。

だが、これを単に消極的肯定とのみいえるであらうか。否。ここには一つの《発見》があつた。例えば「空知川の岸辺」における三浦屋旅館の主人との出会いである。独歩は見ず知らずの自分に「十年の交友」のごとく親切を尽くす主人から、「世界を家と

なし到る処に其故郷を見出す程の人」を心に描き、直接その略伝を聞いていよいよ自分のイメージに近いことを知る。そして「よしや余が思ふ所の人物は、此主人より推して更らに余自身の空想を加へて化成したる者にせよ、彼はよく自由によく独立に、社会に住んで社会に庄せられず、無窮の天地に介在して安んずる処あり、海をも山をも原野をも將た市街をも、我物顔に横行闊歩して少しも屈托せず、天涯地角到る処に花の香しきを嗅ぎ、人情の温かきに住む、げに男はすべからく此の如くして男といふべきではあるまいか。」(傍点は引用者)と記している。ここに我々は、独歩がめざしていた「独立不羈」「平和満足」「自由」(婦去来)なるフロンティア・スピリットの理想像が、「小民」的人間像に微妙につながり合わざつて、ふしぎと調和された人間像の典型を見ることができよう。以後こうした人物は彼の作中にあまり出てこないが、しかし、これは独歩に今後の進み方を示唆する記念すべき出会いであり、発見でもあつた。

では、独歩が「小民」的人間像の内奥に見出した人間的眞実は何であつたか。換言すれば、社会利害、榮辱得喪・名利野心・虚偽・虚飾・虚栄、等々の一切を否定し、それらから脱皮したところに見出されるものは何か。それは人間として最も自然な生き方であろう。或は純粹に内からおのずと生まれ出ようとするものを生きる、本来あるべき自然のままの生とでもいおうか。独歩はこれを「ヒュマニティーの自然」(26・3・21)と呼んだ。

独歩はこの「ヒュマニティーの自然」を「小民」の人生の中か

国木田独歩の「理想の事業」と「小民史」の文学的創造

ら発掘し、そしてこのヒュマニティーの自然」に基づく生き方の中に「人間はいかに生活すべきか」(How to live)を理想、「すなわち「愛と誠と労働の眞理」(26・3・21)を認めてこれを書き記し、社会人心に訴えようとしたのであつた。それはもはや政治家の仕事でも新聞記者の仕事でもない。歴史家の仕事でもない。それは詩人・作家の仕事であろう。「伝記は断じて歴史よりも貴し」という独歩にとつて、「伝記」とはもつと広義における、一つの魂がいかに生きたかの記録を意味したのであろう。独歩はここに「理想の事業」の活路をひらいた。そして「源をち」に始まつて「竹の木戸」に至る一連の作品こそ、この試みの結実であつた。

むろん彼には生活設計上の問題や、「たゞ文芸の爲めに文芸に埋れ度くありません」(奈何にして小説家となりし乎)という彼一流のオリジナリティーに基づく文学への対し方等の理由で、生活に紆余曲折がある。決して文学一筋に生きたわけではなかつた。

けれども、いかなる伝記上の事実をここに対置してみても、やはり彼は「詩神との交通に由りて、」(27・7・18)「ヒュマニティーの自然の声」に基づく「愛と誠と労働の眞理」の発掘に、自己の最高の使命を設定していた事実を消すことはできないであろう。

「潔の半生」「忘れ得ぬ人々」「牛肉と馬鈴薯」「神の子」「悪魔」等の一連の作は、自己の作家的資質を保持するための作家自身の内面の告白——作家が自ら作家たりうるための苦悩の告白に他ならない。独歩は「人間心霊の叫声を聴きて世を教へんと希望する

者は、爾(な)自ら先づ靈の命を得べし。」(26・3・21)という。それはいかにて可能だつたか。即ち「人寰」を脱して「自然」と相面し、再び「人寰」に返ることによつてであつた。

「捷み馴れたる土地に有りては、已に周囲の事物に馴れて人は容易に人生の意味を感獲し得るものにあらず。」(入郷記)それはずなげか。それはこの社会が「社会的の充塞せる社会」(社会と人)であつて、「社会的の力によりて之れに偽惡の表衣を被」(同)つてゐる。これに馴れて周囲に「同化」されると新鮮な感受性を失ひ、「偽惡の表衣」に眩惑されて「靈の眼」も閉じて「人性」の本質を見失うためである。この埋没状態からの「靈の覚醒劑」は、ひとまず「人寰を脱して無言冥々無窮幽玄なる自然と面々相接」(26・10・9)して、世俗の塵を洗い落とし、純粹な自我と靈の命を回復し、忽然と再び「人寰に投ずる」のである。そして「他の世、界より人間の世に降りしが如き感を然し、胸とどろかせ、心にあやしき喜び覚えて、珍らしげにあたりを見廻す」(潔の半生)とき、彼は「偽惡の表衣」が洗い落とされたところに見出される純粹な人性の本質のみを、直観的に照らし出してみることができるのである。「而して其時、彼は最もよく人情を觀、自然を觀、人生を觀るが如し、此時見たる者は決して忘るる能はず、常に彼の心の底に岩清水の如くひそみ居て、時ありて涙と共に、静かに流れ出づ。」(同)この「岩清水の如くひそみ居て、時ありて涙と共に、静かに流れ出づ」るものこそ、独歩の文学的源泉であつた。

現実の動向の中に否定的なエレメントしか見出しえなかつた独

歩は、「社会的」とは「名利追争」の別名であり、「社会生存」とは理想と対立する「社会的弊習」や「社会利害」への埋没に他ならぬとする発想から、ながく離れることができなかった。してみれば、彼が自己の肯定する人間像を「社会的」をばぎ取つたところに見出される存在として描いたのも当然なら、「社会的」の中に規範を見出しえなかつた彼が、天地自然に介在する人間像をより多く描いてきたのも、あながちふしぎではない。今日の我々に「時代を起えた、ある一つの抒情」を感じさせる作品は、一つとして右の例外ではない。それは虚偽とか虚飾とかいつた所謂「社会的」のネガティブなエレメントから洗い出されたところに、世俗の汚醜を拒否して立つ何かしら人間の魂の最も清純にしてナイーヴなものの、人間性の根源ともいふべきものに触れること——彼の作品から受ける抒情の感銘はそういうものである。

かつて独歩自らが小民史の提唱に先行して「議會」文学で奨励した政治小説は、ついに独歩自身の手で創作されなかつた。青年時代、理想の実現をめざす真に肯定さるべき現実的あり方にめぐり会えず、「政治的」「社会的」の全面的否定へ傾いた地点から、「山林海浜の小民」へ共鳴していつたからである。ゆゑに彼は「国民の反映」が「虚栄城中」に墮落した現実を批判者の視点から再現していく「階梯を飛び越えていつたのである。

最後に、「窮死」「竹の木戸」等の「自然主義的」といわれた作がいかにして生れたか。作風が一変したのではなく、「これまで、独歩の作品の中に出なかつたものが出てきた」のだと私も觀る。

「潔の半生」「牛肉と馬鈴薯」等に告白された人間的実存の自覚に基づくポエジーは、当然「窮死」等の社会的モチーフをもつた文学を生む源泉ともなりえたはずである。独歩文学の源泉はワーズワースのポエジーであつたかもしれないが、彼は単にワーズワース的世界のみに始終したのではない。「古より同情こまやかなる詩人達が農夫野人を見て歌ひし詩も到底是れ詩人の感情にして、たま／＼農夫野人は其感情の寄託物となりしのみ。」（「潔の半生」「外部より其人物を観察するのみに非ず」、「其人の内に入りて」）「此世界を見んことを願」（凡人の伝）つた独歩は、古今の詩に対する右のような批判もしている。「小民」は明治日本の現実社会に生きる具体的な人間群像である。だから彼が真に「ヒュ머니ティーの自然」に基づく生き方を小民の真情の中に偽りなく追求していることとすれば、小民を、彼らの生活している舞台——明治日本の現実の中でいかに追求するかという課題と向かい合つてきているのである。一切の虚偽虚飾を脱皮した「ヒュ머니ティーの自然」への素朴な感動からさらに歩を進め、そうした「ヒュ머니ティーの自然」に基づく生き方を、歴史的現実の中でいかに追求していくか——それは初期の「二少女」以来、独歩文学の中に埋もれていたモチーフだつた。彼が「人生の哀感」に感じ入り、その「哀感」の中に、人間本来の性情に根ざすそれとは異質な、といつて語弊があれば、もつと別なところ起因する、たとえば現実の歪みや矛盾に苦しめられるがゆえの暗愁や悲惨に眼を向けるとき、「忘れ得ぬ人々」「源をぢ」「潔の半生」等に見せたあのヒューマ

国木田独歩の「理想の事業」と「小民史」の文学的創造

ニズムが、どうして何の感応も示さぬはずがあるうか。そうして、そのヒューマニスティックな心情が、彼の胸間から「涙と共に」流れ出ないはずがあるうか。それは何かの契機さえあれば、現れ出る可能性をはらんでいたのである。たとえその悲惨の背後の社会矛盾の実体までは解き明かすことはできなくても——。

「或日久大保へ帰る途中にて悲惨なる轢死者の最後を目撃して、帰途余は彼の心事を思ひて、ホロホロと泣きながら家に帰れり。其時の感想を材料として、自殺者の余儀なき運命を描きたるが即ち「窮死」一篇なり。筆を執つても余は泣きつつ書けり。」（病牀

録）

ここに告白されているヒューマニスティックな心情の通う涙は、「忘れ得ぬ人々」や「潔の半生」におけるそれと決して異質のものではないはずである。「窮死」は決して「自然主義風」の「平面的な写実作品」ではない。むしろ私は「もつと自然に、社会性まで発展していく必然性を備えた批判的リアリズムではなかつただらうか。」という疑問の提出に、一つの視点として賛意を表したい。「窮死」はなるほど心理描写が影をひそめているかもしれないが、それは独歩の健康の衰えからくるものであつて、決して「心理的考察を省略」したのではない。それにこの作には、車夫から虫けら扱ひされた下層労働者の内につつ積している、人間としての自己主張や、彼らの間の人間的な愛情の交流、さらにこの愛情の交流を通して仲間としての人間的な連帯感や、彼らの味方といえれば同じ労働者仲間だけであることなどを、作者は彼らへヒ

ユーロニスティックな共感を通わせつつ描いている。しかも独歩のヒューマニズムは、同情やいたわりの心だけでなく、周囲のそうした同情や善意だけではどうにもならぬ限界を見落していないし、社会への批判の眼も忘れない。肺病やみの文公は自殺した。文公の唯一の救いは死そのものでしかなかった。本来なら文公の救いとなるべき養育院の話は、ここでは社会保証制度の不備に対する暗黙の抗議である。

独歩は二人の犠死者を別々に目撃しただけで、その背後にある悲惨をこのように構成したのである。それを思い合わせるとき、もし独歩が38歳の若さで世を去らなかつたら、あるいは、その純粹感情の発動から出発する独歩文学の清新な生命力を存続させつつ、そのヒューマニスティックな純粹感情を源泉として、批判的リアリズムへ発展することも可能だったかもしれない。そんな思いをさえ抱かせられるのである。

〔諸註〕

(1) 塩田良平氏は、独歩の作品をその作風に基づいて次のように分けられている。

甲 彼を自然主義壇上に祭り上げたもの

(イ) 自然を描けるもの及び牧歌風のもの

(ロ) 現実世相を描けるもの

乙 形式は小説であるが、大部分は作者の人生観ないし自然観を思考形式で発表したもの

丙 形式はスケッチであり、構想は殆どないが、明るい平淡な心境を現はし、諧謔に近い分子を有するもの

〔日本文学、聯講第五卷明治篇〕昭8、中興館、その415、416ページ

これは作風に即した分け方としては最も妥当だと思うが、私は以下示すような作品相互間の関連を明示しなかったため、その必要上、あえて作風や形態を基準にした分け方をとらず、モチーフに基づく分け方を試みてみた。

(2) ワーズワース関係

益田道三「国木田独歩」昭23堀書院

益田道三「比較文学散歩」昭31研究社

塩田良平「国木田独歩に及ぼしたワーズワースの影響」〔明治大正文学〕17号および18号に掲載

吉田松陰との関係

猪野謙二「独歩における『政治』——吉田松陰と星亨とを中心とする覚え書」〔昭37河出書房刊「日本文学古典新論」に所収〕

蘇峰の平民主義との関係

山田博光「独歩と民友社」〔文学〕1965、1)

(3) 拙稿「独歩の浪漫主義と『婦去来』の位置」〔『立命館文学』1964、7)

(4) 小田切秀雄「日本近代文学——近代日本の社会機構と文学——」〔1955青木書店〕の170ページ。

(5) 木村のモデルは佐藤毅といって、やはり政治科の学生であったが、熱心なクリスチャンとして青年の独歩に大きな感化を与えた友人であった。(坂本浩「国木田独歩」昭17三省堂)

(6) この時期におけるキリスト教徒の数は明治19年の一万三千から、23年には三万四千へと飛躍的に急増し、それも特に知識人・青年に多く、また儀式を重んずるカトリックよりも、直接神に触れるプロテスタントの影響が圧倒的だったという。(久山康他編「近代日本とキリスト教 明治編」昭31基督教学徒兄弟団発行、創文社刊)

(7) 大久保湖邦宛書簡

(8) 「浪漫主義」および「市民社会の成立と文学」ともに「文学試論集(一)」(1932、東京大学出版会)に所収。

(9) 以上の引用は、改造社版独歩全集(第八巻)が「社会と人」の中の一篇として集録している「安心立命の地」からの引用も多い。これは遺稿であるため、「安心立命の地」を「社会と人」の中の一篇とみるか、独立の別稿とみるかについて多少問題があるうかと思われるが、小論では改造社版独歩全集に従って、「安心立命の地」から引いたところも「社会と人」からの引用として統一したことをわかっておく。

(11) 中島健蔵「国木田独歩と民友社」(昭39読売新聞社刊行の、日本近代文学会編「日本の近代文学」に所収)

(12) 中島健蔵「国木田独歩論」(筑摩書房版現代日本文学全集57「国木田独歩集」に所収)

(13) 筑摩書房版現代日本文学全集57「国木田独歩集」中の塩田良平氏の「解説」より

(14) 佐古純一郎「近代日本文学とキリスト教」(昭39有信堂)の36ページ。

(15) 同(13)に同じ